

トピック

第12回国際肥満学会 (12th International Congress on Obesity) に参加して

京都大学大学院農学研究科

後藤 剛

第12回国際肥満学会 (12th International Congress on Obesity) が2014年3月17日から3月20日の4日間にわたり、マレーシアの首都、クアラルンプールにて開催された。アジア地域における国際肥満学会の開催は1990年に神戸で行われたものに続き、今回が2度目であり、アジア諸国では肥満に関する健康問題が急速に拡大しているという状況も鑑みると、この地において第12回国際肥満学会が開催されたことは大変意義深いように思われた。クアラルンプール市内は気温が高く、雨が多かったため、日中は蒸し暑かったが、会場となったクアラルンプールコンベンションセンターはクアラルンプール市の中心部にあり、アクセス面での利便性は大変良く快適であった。また、学会の各会場は活気に包まれており、肥満問題に対する関心の高さが感じられたが、プログラム上のトラブルも散

見された。

プログラムは8種のTrackで構成されており、基礎から臨床に至るまで幅広く肥満に関する問題が取り扱われていた。日本人では前田和久先生や山内敏正先生、杉井重紀先生が招待演者として口演されていた。筆者は、Track1, 「From cells to systems biology」領域に関心を抱き、中心的に発表を聞いていた。Track1に関する口頭発表は7種のセッションから構成されていたが、その内2種のセッションにおいて褐色脂肪組織についての話題が取り上げられており、褐色脂肪組織機能に関する国際的な関心の高さが感じられた。褐色脂肪組織に関するセッションでは、天使大学の斉藤昌之教授をはじめ3人の日本の先生方の口演があり、諸外国の先生方との質疑応答は大いに盛り上がっていた。ポスターセッションにおいても他の日本人研究者の発表

が散見されたが、全体的には日本からの参加者は比較的少なく感じられた。筆者自身もポスター発表を行ったが、海外の研究者の方々から様々な意見や質問を頂き、今後の研究に対する多くの有益な情報を得ることが出来た。

最後になりましたが、第12回国際肥満学会の参加に際して、トラベルグラントとして支援を頂きました日本肥満学会・春日雅人理事長をはじめ諸先生方、そして多くのご指導を頂きました共同研究者の先生方に心より御礼申し上げます。



会場の様子

味の素株式会社イノベーション研究所

田中 孝幸

この度、ICO Travel Grantに選出頂き、2014年3月17日から20日にマレーシアのクアラルンプールで開催されたICOに参加させていただきました。このような機会を与えてくださった関係各位の皆様深く感謝申し上げます。

ICOでは、肥満に関連する多くの生

活習慣病を含めた領域の疫学・病態・治療に関する研究や脂肪細胞の機能や形態におけるアディポサイトカイン、分子生物学的解析に関する研究、さらには上記研究を組み合わせた基礎研究からビジネスを見据えた応用研究が報告され、広汎な研究・臨床分野の最新

情報を知ることのできる大変貴重な学会であると感じました。また、今回の学会開催地であったマレーシアの国教がイスラム教であるため、学会提供の昼食・軽夕食では豚肉を一切使わない、学会会場内にはサラート（札拝）を行うためのPrayer Roomを設置すると

いった特徴が観察され、現地に暮らす人々の営みや文化を垣間見ることができました。

ICOには、世界各国から、肥満研究者が集まるため（今回は50カ国から約1,300名が参集）、肥満研究全般に関する未公開の研究結果も含めた最新の情報を収集することができました。特に著名な研究者の講演を通して、研究内容は勿論のこと、論理展開法、聴衆の興味を引くために効果的なスライド（例：研究の背景を風刺漫画で示したスライド）やジェスチャー（例：掌を聴衆に見せ、正面を向くオープンポジション）を見聞きできたことは、研究

活動の改善向上を図る上で非常に有用でした。加えて、ICOは、その特長から自身で発表した研究内容を最新の世界動向と照らし合わせることで、絶好の機会となりました。多様で多彩な研究者と実際に会って議論することで、自身の研究へのインスピレーションが得られ、新規の共同研究に発展し得る国際ネットワークを築けたことは、ICO参加における大きな収穫であったと感じています。

昨今の情報通信技術の進歩により、インターネット電話やテレビ会議を利用すれば遠隔地域間の対面的なコミュニケーション・多地域に渡る会議の開

催は可能となってきましたが、既存の概念を打ち破るような未公開の研究結果をクロードな形で議論する、あるいは論理的かつエネルギッシュな研究者との未知なる出会いを手繰り寄せ、それを発展的に育むためには、情報通信機器を介したコミュニケーションよりも実際に学会会場に足を運び、研究者と会って話をする方がより良い結果を生むものと考えます。末筆になりましたが、ICOならびに日本肥満学会の益々のご発展を心より祈念いたします。

立命館大学スポーツ健康科学研究科

二連木 晋輔

第12回国際肥満学会（12th International Congress on Obesity）が、2014年3月17日から3月20日までの4日間、マレーシアの首都クアラルンプールにて開催されました（写真）。筆者は本学会へ初参加だったため、緊張しながら会場に向かいましたが、会場やスタッフの和やかな雰囲気、またクアラルンプールの穏やかな気候に緊張がほぐれていました。

筆者は、「A Novel Simple Method For Detecting Human Brown Adipose Tissue Using Near-infrared Time-resolved Spectroscopy」という題目で、近赤外線時間分解分光法による非侵襲的なヒト褐色脂肪組織の評価法について口頭発表を行いました。これまでヒト褐色脂肪組織はFDG-PET/CTにより行われるのが一般的でありましたが、放射線被曝や費用の制約が多いという問題点があります。一方で、今回発表した、近赤外線時間分解分光法は

非侵襲的に測定することが可能であり、ヒト褐色脂肪組織の新しい評価法として期待されています。発表後の質疑応答においては、近赤外線時間分解分光法による褐色脂肪組織の評価法の有用性と限界および今後の展望についてのディスカッションを会場一体で行うことができました。この経験より、今後の研究への大変重要な意見をいただけたことはもちろん、1つの課題に対して、国を超えて様々な分野、立場、考え方といったグローバルな視点からの情報交換ができたという国際学会ならではの醍醐味を感じることができました。

本学会、本分野は非常に精力的に研究を行っており大変感銘を受けました。学会参加中は少しでも多くの最先端の知識を吸収すると共に、国際的に活躍している先生方の姿勢や考え方など多くのことを勉強させていただくことができ、とても大きな刺激を受けま

した。再来年の第13回大会にもぜひ参加させていただきたいと感じております。

最後になりましたが、今回の第12回国際肥満学会（12th International Congress on Obesity）に参加するために、トラベル гранトの支援を頂きました日本肥満学会、多くのご指導を頂きました浜岡隆文教授（立命館大学スポーツ健康科学研究科）ならびに、斉藤昌之教授（天使大学）をはじめとした共同研究者の先生方に心よりお礼申し上げます。



写真：第12回国際肥満学会の様子